

氏名	ジェームズ ジャック
ヨミガナ	ジェームズ ジャック
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第475号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 海流がもたらす偶有的環境のアート Art in Contingent Currents of the Pacific 〈作品〉 ハヤラン島への地図 Map to Khayalan Island ハヤラン島への舟 Boat to Khayalan Island ハヤラン島への道具 Tools for Khayalan Island ハヤラン島の証拠 I Khayalan Island Artifact I ハヤラン島の証拠 II Khayalan Island Artifact II 偶有的な風景 Contingent Landscape

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	保科 豊巳
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	毛利 嘉孝
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	たほ りつこ
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小沢 剛
（副査）	水戸芸術館	主任学芸員		高橋 瑞木

（論文内容の要旨）

新しく生まれる島もあれば、消えてゆく島もある。最近のそうした例として、小笠原諸島の噴火によって出現した新しい島や、パキスタンの海岸を形成する一時的な土の島の消失を挙げられよう。このことは、ハヤラン島をめぐる私の探求と深く関係している。その島は、イギリス人がシンガポールに到達した19世紀初めに消滅したと言われる。私は、太平洋の海流によって作られる自然物と人工物の混交に導かれるようにして、その島を探す《ハヤラン島》という作品シリーズを制作した。このように、私の作品や思考の背景には、太平洋の偶有的な潮流が存在している。

第1章では、太平洋の潮流によって位置づけられる本論文の全体的な枠組みを述べる。島々の間を流れる海流へのこだわりは、各章において、非常に重要な要素となっている。続いて、本論文を執筆する動機となった問いと、それらを探求するための方法について述べる。問いの多くは未解決に終わるものだが、問いを探求すること自体の中に、数多くの発見がある、というのが私の主張である。さらに、私が、「言葉」とどのように関わってゆくのかを、本論文全体をまとめる要として、簡単に紹介する。私がここで強調したいのは、会話の中に生きる言語の、柔軟な存在形態である。

第2章の主な目的は、本論文のキー・コンセプトの一つである「偶有的な環境」という概念を定義することである。「偶有性」に関する先行研究を検討し、さらに私なりの定義を提示する。ここでは、いくつかの特定の場所で、土地が変化する有様を探求し、「偶有的な環境」に関する実践的な観点を浮かび上がらせる。これは場所の名前についての考察から始まり、私が土のサンプルを採取した三つの場所の調査によって明らかにされる。次に、集めた土のサンプルのすべてがホノルル空港で取り上げられた経験、東京湾などの埋立地を歩行したこと、シンガポールにある埋立地を「Reclaiming Land = 再-主張する土地」と捉えたことについて、省察する。最後に、次章の背景となる、過去の文学的、哲学的、および航海学的観点を提示する。それは、ハヤラン島へ向かう架空の船旅への招待でもある。

アートの実践である本論文の主要な論点が、第3章で展開されるが、それは、「ハヤラン島の物語¹」を語る、ドキュメンタリー・フィクションのスタイルで書かれることとなる。このスタイルは、韻を踏んだ詩に類似しているが、実際には多様な文章形式の融合である。各小節は、ストーリーの全体における役割を担い、それぞれ特徴的な登場人物の視点から書かれている。ハヤランから生じる物体、物語、そしてイメージは、この研究を通して回復される。この文章は、19世紀の雑誌についての文献研究、私が近年に開催した実験的ワークショップ、マレーシアの貿易者に関する植民地科学的記録、口述記録、およびその他の多様な一次資料に基づいている。この章は、今われわれが積極的に探さなければ消滅してしまうかもしれない島の探求の重要な一部である。また、この文章は、展覧会のインスタレーションとペアになっており、言葉と創作作品との密接な繋がりを体現するものであり、この博士論文の後にも継続する。それは実践に基づくアートの研究において、私が用いる方法の要となっている。

第4章は、編集された対話の形式をとるが、哲学的議論と会話における予想外の展開を踏まえている。これは主に《夕焼けハウス》を制作する過程で生まれた、地域住民と非地域住民との会話に基づく。この章は、言語によって作られた壁面から始まり、参加型の庭にまつわる哲学的コンテクストの叙述を経て、「道」に関する議論とアートによって再活性化された鑑賞者論に関する考察で幕を閉じる。その目的は、会話において話された言葉を通じて、《夕焼けハウス》で用いられた参加型の構造に、命の息吹を吹き込むことである。

結論である第5章は、第1章で述べた様々な問いに対する答えを、サステイナブルな視点から提示する。それらは、コミュニティの評価するひとつの方法を記述するために、「シネコロジー（群生態学）」という考え方をを用いて、共生的な自然環境に取り組むことであり、アーティストと研究者を兼ねることの筋道について述べることを含む。最後に、最も単純であるが最も深遠なメディアの一つでもある「水」の変化のただ中にある親密な関係性に関して、個人的な省察を述べる。以上の各章では、欧米的な潮流に対して、太平洋の偶有的な潮流からの新たな視点を提示することを意図している。この制作と考察は、社会的実践のアートを作り変えるだろう。それらを結び合わせる海は、島々に生きる物語とアートをつないでゆく。

1 マレー語において、「ハヤラン」(Khyalan) は想像、空想、白昼夢、幻想を意味する。

(論文審査結果の要旨)

本論文はハワイ、シンガポール、瀬戸内海、東京で制作活動をしてきた申請者が、自らの作品を、太平洋(the Pacific)の海流(Current)の中に位置づけることにより、いかにして芸術作品が場所性、環境を獲得していくのかを示そうとしたものである。それは、作品制作の軌跡を描き出した論考であると同時に、彼自身の方法論、理論の提示であり、また「そもそも芸術とは何か」、「芸術は歴史や空間の中でどのように位置づけられるのか」を幅広い視野の中で考察したスケールの大きな論考として捉えることができる。

本論文の評価は、次の三点に集約できる。

- 1) この二〇年間の間に人文学の間で、陸に対して海、定住に対して移動、人類史的時間に対して地球史的時間を対峙させながらモノと世界の間を関係しようという試みが見られてきた(たとえば、E. サイードの「旅する理論」、J. クリフォード「経路/根源Routes/Roots」、P. ギルロイ「黒い大西洋」)。申請者の作業は、こうした動向を踏まえながら芸術作品の制作の批評の実践の一つとして位置づけることができる。アメリカ(ハワイ)、日本、シンガポールと海を媒介としながら、海をめぐる断片的な物語をなんとか偶有的に繋ぎ合わせようという試みは、今日的な知的実践を切り開くものとして評価できる。
- 2) 現代美術の文脈で言えば、一九九〇年代以降議論されてきた「関係性の美学」(N. ブリオ)以後の動向を踏まえつつ、その関係性の「偶有性」に着目し、コミュニケーションを基盤としたアートプロジェクトを批判的に捉え直す論考としても読むことができる。
- 3) 特にこの論文で評価すべきはその「スタイル」における実験である。とりわけ本論の中心となる第三章の「ハヤラン島のストーリー」はドキュメンタリー・フィクションのスタイルで書かれた章だが、本章

は、いわばテキストによる芸術作品制作の実践であり、彼の創作活動を単に説明するだけでなく、創作活動の一部を構成している。「現実の歴史」と「架空の物語」を繋ごうという「ドキュメンタリー・フィクション」は、実践を通じて申請者の方法論を示す意欲的な試みとして評価することができる。

本論文には、しばしば過度に抽象的でメタファー的にみえる曖昧な表現が含まれている。それは、本論文の重要な魅力でもあるが、執筆過程において学術論文としては問題と感じられた。この点に関しては、事前の指導により必要に応じて注釈が加わる等の対応がなされ、また口述試験において十分満足できる説明が得られた。詩的な記述スタイルを、いかにして学術的論文に組み入れるかという野心的な試みの一つの到達点として肯定的に評価すべきだろう。

以上のとおり、申請者の論文を博士号授与に相応しい論文として評価する。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、申請者の博士論文「海流がもたらす偶有的環境のArt in Contingent Currents of the Pacific」に示されるように、申請者の芸術実践は、1960年代後半以降に数多くのアーティストによる実践と同時進行して重ねられた議論の帰結のいくつかに依拠し、社会と深く関わる現代アートに学際的視点をもつ多様な文脈から発展させた実践と言える。論文の中で、申請者は自らの実践の立場、社会における芸術家の役割を明らかにしている、申請者は、かつて美術史を専攻して、とすれば学術論文が単一の文脈からのみ語られ、科学的である必要から切り捨てがちな想像力と文学的空間を一つの軸とし、また申請者が欧米とは異なる視点を取得した、ハワイという地理的条件に象徴されるオータナティブな芸術実践のアプローチの追究を掲げている。また世界認識のレベルで世界は個人の解釈によるフィクションこそが個人の世界認識であり、オーラルヒストリー（口述された歴史）を今日おきていることにまで想像的思考を拡張することを提唱する。更に芸術家の責任は、個々の地域が抱える問題解決というより、問題を世界に示す、アートを通じて世界に参加することとする。世界各地の自然、コミュニティ、記憶の予測不可能な変化を、社会システムや生態学的システムにおける協働を可能とする偶有的（共に到達する）環境と捉え、対話を重ねて変化する社会的記憶をハラヤン（想像・空想）島と呼ぶ文学的想像空間への航海の物語とし、対話に深く遊び、そこに現れる象徴性をもつオブジェやドローイング、人々が描く島のマップ、などを展示し、鑑賞者が申請者の追究を追体験し、個々の意味を再解釈する機会とした。本作品は、博士論文への批評と提案でもあり。また、参加型の社会実践としての芸術表現に対しての考えと意味を明確に述べる試みでもある。複雑化する世界状況、現代の芸術実践への社会的な理解との乖離、また多様な鑑賞者による作品理解への相違などの問題に加え、十分に共有されているとは言い難い状況を開示した意味は大きい。また、申請者が織りなす物語と象徴的インスタレーションは、現在までの反省から強要することなく慎ましい。

本研究作品は、旺盛な研究心に支えられ、申請者の発表の文脈に考慮した成果であり、問題点の精査と実験性の観点から、大学美術館での博士審査展において審査委員一同の高い評価を得た

(総合審査結果の要旨)

ジェームスジャックの論文と作品は作者の作品制作の旅の起点であるNYでの出発から日本の東京藝術大学で学んだ現在までの、いわゆる制作のライフワークを自己省察と様々な太平洋の島々を廻る実践研究、制作の体験を論述し、かつ制作した作品と論文が分ち難く結びついた総合的博士学位論文と作品によって構成されている斬新な形態となっている。

作者は以前からニューヨークから出発しハワイ、日本さらにシンガポールへと住居を移動しながらそれぞれの環境、民族、地域、地質学、歴史、人類学、環境などとの関係をリサーチしその環境との共生感覚と差異の狭間で身体を沿わせ日常にまわりつく歴史の遺産との関係を行為として実践し、問いかけ、場所の出現する新たな地平へ芸術作品を導きその価値を新たな構造として開こうとしてきた。

博士作品は、「ハラヤン島」と名づけた架空の島を廻るの物語をそれぞれの作品が関連づけられて展示さ

れ、この物語を想起するようナインステレーションとして会場に仕掛けられている。

その作品群は、主に映像、インスタレーション、ペインティング、オブジェ、によって展示場に構成されている、中央に展示されたヨットはシンボルとなる「樹木」が帆にプリントされこのヨットは航海の旅のどこの場所にいるだろうか、またどこに行こうとしているのだろうか？と意味は宙吊りにされて観客に問いかけている。

映像はこれから探し歩く現実体験の記述として、かつてあったであろう島についてのイメージとして任意な参加者によって帆布の上に刻々と描かれていく。隅の傍らには小さなオブジェが博物館の貴重な収集品であるかの様に時間の止まったかのようになアクリルケースに収められている。

果たして何が過去に起こったのであろう、時間の歴史としての問いかけを投げかける。

ドローイングは単色で様々な断章を書きとめて作者の記憶と繋がる断片をしめしている。

作品群は作者の言う「漂流する旅の現場」の様相である。インスタレーションとして、それぞれの断片は美術の文脈を超えてあらゆる分野の価値の文脈を取り入れコミュニケーションの新たな手法を組み立てようとしている、この斬新的で野心的な手法は、作品と観客とのコミュニケーションを誘発する仕掛けとしての場を形成していると言える挑戦的な作品であると評価できる。

論文の論述においては「潮流のもたらす偶有的環境のアート」をテーマにイギリス人がシンガポールに到達した19世紀初めに消滅したと言われる島を契機に時間軸と地平軸をニューヨーク、ハワイ、瀬戸内海、東京湾、シンガポールとさまざま太平洋を廻る地域で実践してきた点を線に結びつけ、歴史のリサーチを通じて出会った出来事、寡黙な物質によって立体的に結びつけようとする試み（作品制作）を物語風に論文の中で綴っている、未来と過去を結びつけてそこに現在の神話を生み出すことのでかろうじて自己のアイデンティティを獲得して生きようとする人間の宿命のように、決してピリオドを打てない曖昧な難解さはここに起因している。

論文は一九九〇年代以降藝術の潮流として議論されてきた「関係性の美学」N.プリオのコミュニケーションを基盤としたアートプロジェクトを批判的に捉え直す現代批評の背景や地質学、民俗学、文化人類学、等の藝術の境界線の外側で論及されている分野についても周辺からの視点を論考として取り込み、現代の地球規模のシネコロジー（群生態学）としての藝術の捉え方として、新しい藝術の文脈形成を探ろうとする試みが論考されている。論文スタイルはドキュメンタリー・フィクションのスタイルで論述されていて、詩やインタビュー、など文学的な文体の導入方法によって、語り、告白、会話、のドキュメンタリーの持つ言語コミュニケーション形式を現実と非現実の境界線に仕掛けている。

メタファーを多く用いた本論文は、この観点で批評的論文とも言える独創性を持っている。

これらの仕掛けは、芸術家の持つ作品思考の即物的言語構造の特異性を暴くものでもあり、藝術とはなんであるのか？ 論文とは芸術家にとって果たして学術でありうるのかを、問いかけた点においても極めて野心的で注目すべき博士論文であると高く評価した。